

## 人生100年クラブ

# 海洋散骨で見送りたい 船で沖合へ、音楽流れ

毎日新聞 2020年5月17日 東京朝刊



海洋散骨を行う遺族たち＝羽田空港沖の東京湾で、吉田航太撮影

### <くらしナビ ライフスタイル>

「終活」への関心の高まりを背景に、弔いの形が多様化している。海に遺骨をまく「海洋散骨」もその一つ。業界団体によると約10年前から増加傾向にあり、選択肢として認知されてきたという。一体どんな見送り方をしているのだろうか。実際の散骨に同行してみた。

#### ●袋に入れて海に

「哲也、バイバーイ。会いたいよ」。羽田空港が間近に見える春の東京湾。洋楽のバラードが流れるクルーズ船の屋上で、約20人が手にした小さな白い袋を海に落とした。水溶性の袋の中身は細かく砕いた遺骨。花や酒をまいて黙とうをささげ、15分ほどでセレモニーは終わった。

広告

Promote health. Save lives. Serve the vulnerable. Visit [who.int](http://who.int)

故人は、東京都江戸川区の田辺哲也さん（享年58）。トレーラーでコンテナ配送の仕事をしていたが、1月下旬にトレーラーから転落し、約20日後に脳挫傷で亡くなった。妻の京子さん（54）は突然の別れに「今も実感がない」と話すが、迷わず散骨を選んだ。生前、夫婦で「死んだら遺骨は海にまこう」と話し合っていたからだ。田辺さんに引き継いだ墓はなく、「娘2人に墓守をさせたくない」と新たに作るつもりもなかった。

亡くなった直後に寺で葬儀を営んで火葬し、通常の四十九日法要に近い時期に合わせ、散骨することにした。業者は次女の奈々さん（29）がインターネットで探し、遺骨を渡す以外のやりとりはほぼメールで済んだという。「手軽で費用

もリーズナブル」というのが京子さんの印象だ。当日、音楽好きだった田辺さんのために奈々さんが選んだ曲が流れ、参列した親族や友人からは笑顔も浮かんだ。遺骨の一部は小さな容器に入れて「手元供養品」として残した。京子さんは「本人も喜んでいると思う。遺骨も手元にあるので夫をずっとそばに感じられます」と遺影を見つめた。

田辺さんの散骨を担当したクルージング会社「スパイスサーブ」（港区）の島田快さん（31）によると、数年前から客の要望が寄せられたことから昨年1月に海洋葬専門部門を創設。1年間で約180件を請け負った。船を貸し切る「ファミリー散骨」（9万円～）、スタッフが遺族に代わって散骨する「代理散骨」（3万5000円）などのプランがあり、大半がファミリー散骨で、8人以下の少人数プランが人気だ。「故人の希望で散骨を選んだ方が多いので遺族も前向きで、8～9割が明るい雰囲気です」と話す。

### ●規制する自治体も

散骨を法律上禁止する規定はなく、国は「節度をもって行われる限り刑法上も違反はない」との見解を示しているが、風評被害の懸念から規制する自治体もある。散骨を行う約40業者でつくる一般社団法人「日本海洋散骨協会」は2014年に作成したガイドラインで、散骨場所は陸から1カイリ（約1.8キロ）以上離れた洋上▽人骨とわからないよう遺骨は1～2ミリ程度に砕く――などのルールを定めている。協会に加入していない業者も多いが、選択の際の参考にもなりそうだ。

協会の広報担当、村田ますみさん（46）は「まずは安全のため、保険加入などが義務づけられている運航事業の許認可を得ているかを確認すること。料金が格安の場合、遺骨を郵送で受け取るなど死者の尊厳を守らなかつたり、許認可なしで運航したりしている恐れがあるので気をつけましょう」とアドバイスする。

【牧野宏美】